

北野武監督『座頭市』——外見と実体

佐々木 隆

プロローグ

2003年は日本の映画界にとって記念すべき年であった。小津安二郎生誕100年ということから、日本映画全体を回顧する機会となった。そんな中、3月に宮崎駿監督『千と千尋の神隠し』が長編アニメ部門で米アカデミー賞を受賞、9月には北野武監督『座頭市』がヴェネチア国際映画祭で銀獅子賞を受賞した。また、監督だけでなく、日本人俳優も活躍し、東京国際映画祭では、中国映画の『暖』に主演していた香川照之が男優賞を受賞、米ゴールデングローブ賞とアカデミー賞では、『ラスト・サムライ』でトム・クルーズと共演した渡辺謙が助演男優賞にノミネートされた。

2003年9月6日、北野武監督『座頭市』の銀獅子賞受賞は、1952年の溝口健二監督『西鶴一代女』以来、51年ぶりとなる。9月6日は北野武が尊敬する黒澤明の命日である。黒澤は生前北野に「日本映画を頼む」とのメッセージを残したと言われ、このふたりの関係が並々ならぬものであることがわかる。また、今回の『座頭市』の衣装デザインを担当したのは、黒澤明の長女の黒澤和子であったことも黒澤—北野の関係の深さを感じさせる。北野は1997年に『HANA-BI』でヴェネチア国際映画祭金獅子賞を受賞しており、『座頭市』は同映画祭の非公式の賞、CIAK観客賞（伊映画誌が観客の投票で選ぶ賞）、デジタル・アワード、オープン2003特別賞、監督賞と合わせて4つの賞を受賞した。日本での公開は9月14日。9月15日にはトロント国際映画祭で、観客が選んだベスト作品としてピープルズチョイス賞を受賞したとのニュースもすぐに報道された。

『座頭市』の前評判・関心度、そして海外での受賞などマスコ

ミをにぎわせたが、『座頭市』のプロットに隠されたもっと深いテーマを明らかにして行くことで、『座頭市』が何故国際的な評価を受けたがはっきりしてくるものと思われる。

1 日本における一般公開前の関心と評判

日本での公開に先立ち、ヴェネチア国際映画祭にて先行上映となった『座頭市』には、いくつかの関心が寄せられていた。マスコミ等の報道内容をまとめてみると次の通りになろう。

- ①勝新太郎の『座頭市』のイメージをどうふりはらっていくか。
- ②どんな時代劇にするのか
- ③タップダンスのシーンはどうなっているのか。
- ④どんなエンターテイメントになっているのか。

上記のことについて、北野監督自身がインタビューで答えている内容をまとめてみると以下の通りとなろう。

- ①金髪にしてみた。⁽¹⁾
- ②時代劇独特の言葉遣いにこだわらず、言現代語のままにした。殺陣について、浅草時代に身に付けたものをそのまま映画に活用した。⁽²⁾
- ③・④楽しい映画にしたかった。時代劇でタップというのもいいのではないか。⁽³⁾

北野自身の言葉は少ない。重要なことは、むしろ彼が語っていない部分の効果であろう。まず第1に、北野は単に『座頭市』のリメイク版を製作しようとしたのではないということだ。頭髪を「金髪」にしたのは、勝新太郎の座頭市との異質性とこの映画全体の中での座頭市の異質性を強調する効果を生み出していると考え

えられる。盲目であるという異質性をさらに視覚的に表現したことになるだろうか。時代劇について言えば、北野は以前より、「時代劇をとにかくやりたい」という思いを持っていた。⁽⁴⁾ また、第2、第3の時代劇、タップといったことと金髪は無関係ではない。時代劇に現代語を遣い、さらにタップを導入するなど、時代劇の枠に全く当てはまらないようにさえ思える。しかし、実は、このあたりに北野の仕掛けがあるのだ。勝新太郎の『座頭市』シリーズとは大きく違った点である。もちろん、時代劇特有のプロット（浪人夫婦が仕官先を求めて流浪する中、妻が重い病に伏せる。御前試合での屈辱。旅する不遇の姉弟。悪党一味。代官を女と酒と賄賂でもとなす。手下一同の托鉢僧。怪しげな忍者等）が盛り込まれているのだが、時代劇にリズム感を与えていることが大きな違いである。この集約が最後の祭りで披露される踊り（タップ・シーン）となるのだ。その伏線として、冒頭部分の農民4人が鋤で田んぼを耕すシーン。その鋤使いは時代劇としてはむしろ異様な感じであるが、その鋤を鋤くリズムがタップのリズムになっている。また、後半に雨の中で田んぼにいる4人の農民のしぐさは田んぼの中のタップである。新吉の家を村人が新しく建てている時ののこぎりをひき、鉋をかけ、かなづちを叩くリズムはタップのリズムである。また、スピード感溢れる殺陣は、むしろリズムのよい殺陣と言った方がいいかもしれない。これまでの時代劇特有の「間」をリズムという新しい西洋の「間」におきかえた時代劇ということになるだろう。“samurai musical”と評する海外メディアもある。⁽⁵⁾ 『雨に唄えば』を時代劇風にアレンジしたわけではないが、海外ではタップのリズムから北野監督自身が言うエンターテインメントを十分に感じとったと言ってよいだろう。このリズム感には、どうしても時代劇特有の言葉遣いでは、対応しきれない部分があり、現代語の持つリズム感をフルに活用したことになる。また、北野自身が漫才師として身に付けていたリズム感をそのま

まこの時代劇に反映させたとも言える。

2 大きな3つのテーマ

北野監督自身がインタビュー等で触れていないこと、また、映画評でも特に触れられていないものとして、「善と悪」、「外見と実体」（虚と実）と「ディスガイズ」（変装）、「生きる力」の3つの大きなテーマがある。

第1の「善と悪」のテーマについては、何が「正」「善」で、何が「邪」「悪」なのかを決めるのは、そんなに単純なことではない。北野武扮する座頭市自身、「正」なのか「悪」なのかを決めることはできない。「正」でもなければ「悪」でもないというところか。ただ言えることは、座頭市は人から頼まれもせず、自分の信念に従って行動しているということだ。キリスト教では the *cardinary virtues* と the *deadly sins* という「七徳」「七大悪」という考え方がある。現実世界では、こうした二元論的な考え方では物事は解決していかないのである。むしろ、現在自分の置かれた状態の中で、あるがままの状態を受け入れていく中で考えて生きていくしかないのである。この考え方は禅の中心的な考え方である。しかし、西洋でもこうした考え方を取り入れて多くの作品を世に送り出したのがシェイクスピアである。彼はしばしば作品の中で

いいは悪いで、悪いはいい（『マクベス』第1幕第2場）

美德そのものが悪徳に転ずるも用法次第、
行動次第で悪徳もまた榮譽をうる（『ロミオとジュリエット』
第2幕第3場）

いいも悪いも本人の考え次第（『ハムレット』第2幕第2場）

といったことを登場人物の口から語らせている。自分の置かれた状態の中で、自分の判断で行動していく座頭市。御前試合で屈辱を味わい、病身の妻の葉代稼ぎに用心棒を働く浅野忠信扮する服部源之助。不遇な人生を過ごし、親の仇を探す大家由祐子扮するおきぬと橋大五郎扮するおせい。この4人は多くの人の命を奪うが、「悪」のレッテルをべったりと貼ることができるだろうか。その背景には、「くちなわ」一味とは違い、金銭欲ではなく、自分の信念、親の仇やプライドといった内容が色濃く現れている。人を殺めるその原因となっている根本が全く違うのである。

第2の「外見と実体」(虚と実)と「ディスガイズ」(変装)のテーマについては、おきぬとおせい、特におせいに代表される。清太郎という男でありながら、女を装うことで目的を達成しようとし、さらには女として生きていこうとする。親の仇討ちがすべて終わった後、ガダルカナル・タカ扮する新吉に「みんなで一緒に暮らそう。お前も男に戻って」と言われると、「この方が都合がいい」と答えるおきぬ。清太郎としてではなく、あくまでもおきぬとして生きようとする。「この方が都合がいい」という台詞は、ラストシーン近くの座頭市の台詞にも見られる。くちなわの一味の本当の頭との対決の場面で、実は目が見えるのに、目が見えない振りをしている演技をして、「この方が都合がいい」からと答えている。くちなわの頭が本当の正体を明らかにしなかったのもまた、「都合がいい」からであり、この世の中を生きていくには、「都合のいい」方の姿で生きていくということになるだろうか。くちなわの一味、銀蔵扮する岸部一徳、扇屋扮する石倉一郎、飲み屋の親父扮する柄本明、またその飲み屋の雇い人扮する桶浦勉。姿を変えて町に住むくちなわ一味。さらには、くちなわ一味の中でも、誰が頭なのかといった二重、三重の「外見と実体」の構造が構築されている。新吉も、賭場であんまさん(座頭市)の真似をして、目をつぶった状態で博打に挑んだり、おせいのように女装してみ

たりと、外見の部分での変化にこだわっていたが、外見の変化からやがて「外見と実体」に気付く、あるべき自分の姿に辿り着くのである。こうした「ディスガイズ」は、水戸黄門がちりめん問屋のご隠居、遠山奉行が遊び人の金さんに変装するのに共通するところであり、こうしたドラマツルギーは、シェイクスピアが最も得意とするところである。

第3の「生きる力」のテーマについては、第2のテーマのもう一つの見方ともいえる。つまり、おせいに代表されるように、「外見と実体」と「ディスガイズ」は、すべては「生きるための手段」なのである。生きるためには、自分を変えていかなければならない面がある。この生きる力をどう発揮するかを端的に表しているのがおせいであるといえる。また、コミック・リリーフの役割を果たしている新吉は、伏線的な役割を果たしていると思える。タイトル・ロールの座頭市は、私利私欲ではなく、生きていくための最低限のところ、自分の信念に従って生きていく様子をはっきりと描かれている。くちなわ一味が人を殺めるのと座頭市が人を殺めるとでは、行為は同じであっても、観客の心に残るのは、人を殺める背景にあるものだろう。そのことは服部源之助やおせいについても同様であろう。また、家を焼かれた新吉一家が、村人の力を借りて、新しい家を建てるシーンは、村人の生きていこうとする力強さを感じさせるとともに、新吉自身が新しい自分に生まれ変わろうとするその姿勢を視覚化したものともいえる。

エピローグ

3つの大きなテーマをもとに『座頭市』を見てきたが、「善と悪」、「外見と実体」と「ディスガイズ」は、演劇にも相通じるものである。特に「外見と実体」と「ディスガイズ」については、シェイクスピアの作品とも大いに関係の深いところである。『座頭市』が海外で評価を受けたのは、単に映像やエンターテインメントの記

分だけではない。脚本の中で、シェイクスピアにも当てはまるドラマツルギーがうまく盛り込まれているからにほかならない。シェイクスピアに代表されるヨーロッパ演劇の根底にあるドラマツルギーを感じとることができるのだ。しかも、座頭市を主人公にしながら、服部源之助、おきぬとおせいの生き様を伏線にしながらか、実は最もわかりやすい形のプロットとして新吉の変貌振りを最後に見せているのだ。

注

- (1) パンフレット『座頭市』(オフィス北野, 2003年9月), p.49
- (2) Ibid., p.48
- (3) Ibid., p.52
- (4) 渋谷陽一インタビュー・構成「北野武 I ——平成三年七月スタジオ・エビスにて」(斉藤まこと、池野若弓、竹林正子編『黒澤明、宮崎駿、北野武——日本の三人の演出家』ロッキング・オン、1993年9月), p.282.
- (5) Bradshaw, Peter and Malcom, Derek. “Sex and the Samurai” (*The Gaurdian*. Friday. September, 5, 2003). (<http://film.guardian.co.uk/print/0,3858,4746880-110516,00.html> より)

*シェイクスピア劇の翻訳は、小田島雄志訳による。

キーワード：北野武、『座頭市』、シェイクスピア